

公共空間における宿根草をベースとした植栽の可能性と課題に関する一考察

吉村晶子¹

¹正会員 名城大学 (〒468-8502 愛知県名古屋市天白区塩釜口1-501, E-mail: ayos@meijo-u.ac.jp)

キーワード: ナチュラリスティック植栽, 順応的管理, 市民参加, サステナビリティ

近年、「ナチュラリスティックな植栽」と呼ばれる宿根草をベースとしたランドスケープデザインが公共空間に導入されつつあり、市民の①環境への心が育つ、②現場への心が育つ、ことへの効果が期待できるほか、公共的にも③環境への責任ある主体を育てる、④市民参加のあり方を示す、など、持続可能な環境と社会の実現に向けた貢献ができる可能性がある。しかし、課題として、現時点での①公共空間の設計・維持管理の枠組みでは対応しきれない要素をもち、また②これまでの市民参加の枠組みでは対応しきれない面もあるため、関与する人材の個人的努力に成否を委ねざるをえない現状がある。個人による奮闘努力があれば良好な空間ができ地域活性化に貢献する可能性があるが、人材の疲弊が続くと地方から人材が流出してゆきかねないなど地域衰退につながる懸念があり、いま、認識の共有と枠組みの整備が求められる。

Key Words: *Naturalistic Landscape Design, Adoptive Management, Public Involvement, Sustainability*

1. はじめに

(1) 本稿の問題意識

これまで日本の公共空間では高木・低木・一年生草本を中心とした植栽が主に用いられてきたが、最近では多年生草本による植栽も増えてきた。直近でも日本造園学会ランドスケープ研究で「在来の草本植物を用いた植栽事業の現状と可能性」特集が組まれるなど、草本植栽への注目が上がってきている。

本稿で扱うのは謂ゆる「ナチュラリスティックな植栽」の取り組みであり、とくにピート・アウドルフ氏が展開した *New Perennial Style* の植栽を念頭に置く。本稿では、これら宿根草をベースとした植栽が公共空間に導入されることにより得られる効用と課題を考察する。管理面から見ると、街路などの公共空間で従来されてきた木本と一年生草本を中心とした植栽では、量的な管理（年間の剪定や植え替え等の回数を決め、その量を発注する）を行ってきた。ナチュラリスティックな植栽では、量的な管理では限界があり植物の状況に応じた順応的管理により質的な管理をしていくことが必要である。

維持管理も含めた植物との関わりあいはいひとつの文化であり、公共空間における植栽の役割は文化面での効用

も含めて考慮すべきである。公共空間にナチュラリスティックな植栽を導入し、管理方法とその枠組みを工夫していくことによって、社会参画する責任ある主体の形成や、持続的な環境の価値への感性を地域コミュニティで育み共有する契機となる可能性があるのではないかと考える。さらに、少子高齢化や価値観の多様化が進み多くの課題を抱えた現代日本の地域社会に対し、今後の自治のあり方や持続可能な社会の構築に向けた重要なインパクトを与える可能性を見出し得るのではないかという観点から、その効用と価値共有、維持管理と評価について問題提起し、今後のあり方を議論したい。

(2) 本稿対象のナチュラリスティックな植栽について

「ナチュラリスティックな植栽」の定義は専門家の間でも少しずつ異なるが、宿根草を主力の植物に使った自然風の植栽であることは共通している。宿根草は、多年草のうち落葉のものをいう。冬に地上部は枯れても地中部が越冬し、翌年の早春に新芽が芽生える。ナチュラリスティックな植栽デザインでは、冬から春、夏、秋へと、季節の主役になる植物がオーケストラの主旋律のように入れ替わりながら咲き、あるいは美しい枯れ姿を見せ、四季を通じて刻々と変化していく。

いわゆる自然風という意味での「ナチュラルスティックな植栽」は、古くからイングリッシュ・ガーデンなどで日本に入り、寒冷地を中心に展開されてきた。これらの地では「ナチュラルスティックな植栽」は自生種を用いるなどの特徴があったが、近年は世界に **New Perennial Movement** を引き起こした植栽デザイナーのピート・アウドルフの作風に影響を受けた植栽という意味で「ナチュラルスティックな植栽」が使われることが増えた。

オーナメンタルグラスと宿根草を効果的に用いたピート・アウドルフによる **New Perennial Style** 植栽が 2000 年代以降に欧州の公共空間で展開され世界的に広まるに従い、ピート・アウドルフ風の植栽が日本でも広まり、各地で試行が始まった。本稿対象の「ナチュラルスティックな植栽」は、このピート・アウドルフ風植栽のことを指す。

一方、公開空間への **New Perennial Style** 植栽の嚆矢となった米国・シカゴのルーリー・ガーデンでピートと協働したジャクリーン・ファン・デル・クルートのデザイン・監修による球根ミックス植栽が、2017 年より佐世保のハウステンボスや第 33 回全国都市緑化よこはまフェアでの新港緑地のジャクリーン・ガーデンで行われ好評を博し、こちらも日本各地で取り入れられていった。

オーナメンタルグラスと宿根草によるピート・アウドルフ風の植栽と、球根ミックス植栽とは、本来、異なるものである。特に春の風景が異なり、ピートは冬に全てを刈り込み、春にはカットバックした株からの新芽のめぶきだけに春を感じさせる手法をとる。そのため春に色とりどりのチューリップが一面に咲くミックス球根植栽とは早春の風景が大きく異なる。後述するように地の色を尊重するピートには、園芸種のチューリップが咲き乱れカラフルな色を加える風景は作風の中にはない。

しかし後者は花一面の風景であるだけに大衆に受け入れられやすく、日本での導入例が多い。そのため、現時点の日本で「ナチュラルスティックな植栽」というときには、夏・秋・冬はピート風の **New Perennial Style** 植栽で、春はジャクリーン風の球根ミックス植栽のことがイメージされることも多い。球根ミックス植栽を導入すると平米単価は約 3 倍になるが、大衆受けの良さは捨てがたいのだろう、日本では切り株からの芽吹きだけの **New Perennial Style** になかなか振り切られることがない。万人受けしない風景ということについては前稿²⁾でも話題にしたが、大衆迎合的な風景は、ただ鑑賞するだけのフリーライダーを育てるだけかもしれない、多少コンテンポラリー・アートの的であっても（ピート自身も近年そのように自作を語っている）、持続可能な環境への感性を育てる文化的側面や情操教育においては評価すべきであろう。

(3) ピート植栽デザインの哲学について

New Perennial Style 植栽とその哲学については前稿²⁾で少

しく記述したので、ここでは要点のみにとどめる。まずピート・アウドルフのデザイン哲学では、**New Perennial Style** の植栽デザインとはただ植物を扱うものでなく、植物の構造、形、性格を扱うものであり、さらにはアンビエンス、季節性、感情が重要であるとしている³⁾。

New Perennial Style 植栽で、ピートは新しい感性を植物の鑑賞に持ち込んだ。まず、従来主役と考えられていた花の鑑賞を二の次にし、植物の形や葉の鑑賞を第一にもってきた。さらには花が終わったあとの枯れ花やシードヘッドなど冬枯れした植物の姿を主役となる鑑賞対象として扱おうとしていることが特筆される。花だけを愛でる従来の鑑賞法とは大きく異なる感性の導入である。二の次にした色彩についても、華々しい色彩ばかりでなく、渋好みの色を積極的に評価し、さらに、特に鑑賞者が目をとめることもないような、植物のまわりにあるありふれた色であるアースカラーや地の色を、鑑賞者が再発見すべき色としてとりあげている。つまり万人受けする華美な花だけを鑑賞対象とするのではなく、植物そのものの多様な個性と生命を尊重し、植物の生きざま全体を評価する態度であり、単に植物の鑑賞ということを超えた、新しい植物との付き合い方の提案である。

さらに、アンビエンス、季節性、感情が重要であるとしている。このことは徹底しており、彼の仕事を追ったドキュメンタリー映画「**FIVE SEASONS**」⁴⁾の中でピートは「イメージ画は描かない」「それは瞬間のことでしかないから」と話している。ピートは、季節や日々の移り変わりとともに風景も空間も移り変わりゆくというその全体を、季節性をこそデザインしているのだから、ある瞬間のみを切り取ったイメージ画など要らないのだという信念・デザイン思想をもっている。また、色や形よりも、その場所で私がどのような雰囲気にも包まれるのがより重要な関心事であるとする⁵⁾。対象物として植物を見る・鑑賞対象とするのではなく、植物に取り囲まれ、同じ空間で植物とともに時間を過ごし、現場を生きる時のアンビエンスと感情をデザインしているのである。一種の体験芸術ともとらえられる。

2. ナチュラルスティックな植栽のもつ可能性

(1) 環境の心を育てる

ピート・アウドルフの思想は、これからの持続可能な社会構築に重要なインパクトを与える可能性をもつ思想であると考えられる。持続可能な社会の構築には、環境への心をもつ市民が育つことが長期的・本質的に必要である。一年生草本の花は華美であるが、花の風景の維持には年 2 回ないし 4 回の植え替えを要し、大量消費・大量廃棄の末に変化のない風景を生み出すばかりである。植物にも様々な個性があり、華美な花だけでなく生命ある存在、

この地に共に生きている存在として認める態度を育てることができるような植栽が実現できたならば、それは環境の心を育てる植栽となる。

(2) 現場の心を育てる

Google Map に導かれるまま行き先に行き、その場所の環境に何ら関わることなく過ごすことが多い現代人にとっては、本当の意味で現場を体験するということが希少な体験となりつつある。主体-客体というように分け難いのが環境の本質ではないかと思うが、対象化を前提としないデザインという困難な仕事を、ピート・アウドルフは、絵に描けないような季節性とアンビエンスを重視することで実現とする思想をもっている。ピートのもうひとつのキーワードである感情というの、その環境に身を置く喜びのことであると思われる。つまり、素晴らしいコンポジションを愛でるのではなく、コンポジションはどうあれ、その現場を「生きる」ことにはそれだけでも大きな意味があると価値づける思想である。

(3) 環境への責任ある主体を育てる

現代人の多くが都市に暮らしている以上、日々出会う空間は誰か他人が管理する空間である。カエルが鳴くのがうるさいから騒音対策せよと田んぼの持ち主に言い、子供の遊ぶ声がうるさいと苦情を役所に言って公園を廃止させてしまう⁷⁾といった現代人が出現している。その空間が美しさや快感を人に与えるものであったとしても、それをただ鑑賞するだけのフリーライダーが増え、環境への責任ある主体が育ってゆかないのであれば、持続性がない。植物には手入れが要る。順応的管理が必要な宿根草花壇などでは特に植物のお世話が必要である。環境の心が育ち、本当の意味で現場を生きる人びとが増えれば、ただ鑑賞するだけのフリーライダーでなく、環境への責任ある主体が育つきっかけとはならないだろうか。

(4) 市民参加のあり方を示す

植物の手入れにボランティアを動員することは悪いことではないが、市民参加を単なる行政のコストカットの手段にしてはならない。植物とくに草本で、量的な管理ではなく質的な管理を要する場合にはガーデナーが必要である。その専門性は正当に評価されるべきであるし、正当な対価が支払われるべきである。その人材育成も視野に入れて進めなければ持続性がない。また、平日の定時内など現役世代が参加し難いようなやり方で市民参加を進めることは、その人びとが環境と関わりあい、責任ある主体となる機会を奪っている。現役を退いた人びとの余暇活動や生きがいづくりも大切なことではあるが、ボランティアの手を借りてフリーライダーを喜ばせるだけのことになってはいけない。

3. ナチュラルスティック植栽の導入における課題

(1) 「ローコスト・ローメンテナンス」への3年間

公共空間にナチュラルスティックな植栽を導入して欲しい植物専門家や造園関係者が行政に対しアピールする方法としてこれまで用いてきたのは、「効果」について美しい宿根草花壇の事例写真を示し、「費用」について宿根草はローコストでローメンテナンスであると示すという2点であった。費用対効果が大いという論理、つまり行政にとって都合がよい話になる論理でアピールしてきたわけである。これは当然の論理構成であり、初期導入には効果があった。しかし実際導入してみて本当はどうだったのか。導入事例が出揃ってきたので見渡してみると、宿根草はローコスト・ローメンテナンスで美しい風景が出来るということについての具体的なイメージ、発注のしくみや工程に関する認識のズレから妙な誤解や困難が生じた例が少なくなかった。

まず、一般に宿根草の苗は一年草よりも価格が高く、花壇の整備等も伴えば導入時の初期コスト（特に1年目にかかる費用）はローコストではない。植物は定着するまでは不安定であり、生育環境にもよるがかなりハイメンテナンスになる場合もある。土との相性の問題もあり、場合によっては悪土の土壌改良が追加で必要になることもある。トータルではローコスト・ローメンテナンスであっても、植物が十分に成熟し自立安定するまではそうでもないことを覚悟する必要がある。植物が成熟した株となってくるとメンテナンスは引き算のフェーズになり、ローコスト・ローメンテナンスのメリットが得られ、例えば株分けをして他所に提供するなどの活動もが可能になってくるが、それは概ね3年目以降のことである。

さらに、宿根草植栽では一般に、植物が成熟したときに適切な構成・密度となるようデザインするため、とくに1年目は植物の密度が低く、株が未成熟であることも相まって、全体としてかなり貧弱で見栄えがよくないことが往々にしてある。その間、ボランティア参加者のモチベーション維持が難しくなることもあるし、周辺住民からみずばらしいので以前の一年生草本の花壇に戻して欲しいなどの意見が寄せられることもある。宿根草のメリットが得られ、日々変化していく美しい風景が楽しめるのは3年目以降のことと認識し、それまでの間は少々のクレームが来ても耐える、という覚悟が関係者に共有されていなければ、廃止の危機が訪れる。特に、当初導入時の「効果」アピールの場面で3年目以降の成熟した美しい事例の写真を使った場合には、認識と覚悟を共有できるよう、丁寧に説明していく必要があるだろう。

また、一段階上の話として、本当にローメンテナンスということがあり得るのかという問題もある。生命ある素材を扱う分野である。植物のお世話をするというのは、

指示どおり・時間どおりで割り切れるものではない。心をこめて手をかければかけるほど、植物たちは良くなって期待に応じてくれる、ということを知っている現場ガーデナーであればあるほど、途中で割り切って手をかけずに止めるなどできなくなる。一年草のように植え替えの手間が無いのは確かでも、宿根草であればメンテナンスが楽だというものでもない、のが実際のところだろう。

「ローコスト・ローメンテナンス」への誤解が見受けられればうまく理解を得る努力をし、覚悟の共有のもと、特に1年目、植物から目が離せないハイメンテナンス期かつ見応えに乏しい時期を乗り越える工夫が必要である。

(2) 順応的管理のもつ専門性としくみの必要性

街路樹の剪定や、公園の一年草花壇の植え替えなどの一斉作業、芝生など単一種の植物管理では、一律にどの長さで切るなど仕様と回数を量的に決めて発注がなされ管理がなされる。単純化・量化された指示のもとに管理が行われるため、ボランティアやシルバー人材などでも誰でも迷いなく・間違いなく作業が出来る。これに対し、多種多様な多年草を用いた宿根草植栽では、植物の状態に応じ現場できめの細かい順応的管理を行うことが必要となる。それは植物の成長や環境に合わせて作業を調整しながら良好な状態を保つ、質的管理となる。

具体的には、散水、除草、植栽植物の品質管理（摘芯・切り戻し・花がら摘みの実施）、病害・虫害への対応、支柱立て、補植・球根植え付け、マルチング補填などの作業であるが、これが適切に行われることにより、植物が良好な状態となる。その際、散水なら散水の回数（量）ではなく、植物の状態をみてそれに適した適切な散水によって水切れや傷みを起こさず良好な状態を保つという質の確保が求められ、現場のガーデナーに裁量をもたせて専門性を発揮してもらう必要がある。除草ひとつとっても、除草すべき雑草と植栽された宿根草が識別できなければならず、さらに在来種も活用されたような花壇では残すべき在来の野草をも見分ければならず、ガーデナーの指導のもとボランティアを活用するとしても、このような識別能力を要する作業は、誰でもできるような単純作業ではないため一定の修行（ボランティアであれば勉強意欲と覚えられる若さと継続的参加）を要する。

順応的管理は、管理・モニタリング計画の策定→モニタリング・管理実行→結果の評価→次期計画へのフィードバックという循環的な行程による管理のことであり、それをいかにシステム化し、評価を客観的なものとし、説明責任を果たせるものとするかが特に公共空間の場合には重要である。民・官・学が協働したシステム構築などが造園分野でも試行・提案されている⁹⁾。特に街路などの公共空間での植栽の維持管理ではこれまでは量的な発注が主であったことから、順応的管理を要するナチュ

ラリスティックな植栽を導入していくには、どのように質的管理を確立し組み入れていくかが問われる。また、ボランティアの参加においても、行政の区分では「清掃作業」としか位置づけられないことがあり、単純作業のボランティアしか区分が存在しないなど、しくみが追いついていない面がある。これらの整備が必要である。

(3) 事例検討

発表会では、熊本市の中心市街地の街路にナチュラルリスティックな植栽を街路に導入した事例をとりあげ、取り組み状況と工夫された点、ならびに質的管理の評価のために提案されたチェックシートなどをみていき、都市緑化機構第42回「緑の都市賞」で内閣総理大臣賞を受賞することに貢献した本事例をグッド・プラクティスとして評価するとともに今後のあり方について議論したい。

ガーデナーの職能についても、きちんと評価して位置づけるべきと考える。そうでなければ、人材流出にもつながりかねない。また、公共空間で主要な役割を果たす土木・建築分野の人材についても、人材育成段階で現状の工学系学科では植物知識についての教育がほぼ皆無である。宿根草の順応的管理の技術面での議論はともかく、公共空間で重要な役割を果たす植物の質的管理についてある程度の議論ができるくらいには植物の基礎教育も必要なのではないか、検討の余地があるだろう。

謝辞

永村裕子氏に多くの示唆と情報・資料の提供を頂いた。記して感謝する。

REFERENCES

- 1) ランドスケープ研究 2023年1月号
- 2) 吉村晶子：新・宿根草ムーブメントにみるデザイン思想と日本における草本ランドスケープの可能性。景観・デザイン講演集 No.15, 2019
- 3) Noël Kingsbury & Piet Oudolf: Oudolf Hummel: A journey through a plantsman's life, The Monacelli Press, 2015 ; p.71
- 4) Thomas Piper (監督) : FIVE SEASONS : The Gardens of Piet Oudolf. 2017, 1h16m
- 5) Piet Oudolf and Henk Gerritsen: Planting the Natural Garden, Timber Press Inc, 2003; p.85
- 6) 金井かおる: 「カエルの鳴き声がうるさい」 田んぼの持ち主に苦情。まいどなニュース 2023年5月29日
- 7) 「子供うるさい」苦情の公園改めて廃止表明 長野市長、土地借りられず。産経新聞 2023年3月1日
- 8) 相澤 章仁「都市緑地における市民参加型の順応的管理システムの構築に関する実践的研究」千葉大学学位論文、2011.1